

会報
峠
とうげ

河井継之助記念館
友の会会報
第35号
2024.3

『編集・発行』
河井継之助記念館友の会
新潟県長岡市長町1丁目甲1675-1
〒940-0053
Tel.0258-30-1525
Fax.0258-30-1526
頒布価：50円（送料別）

『編集人』
荒木法子 恩田富太
白石恒夫 中野武夫
友の会事務局
『構成・印刷』
高遠印刷株式会社

『河井継之助と良寛』

出雲崎町良寛記念館館長 永寶 卓

河井継之助の言葉

「河井継之助」の名を初めて聞いたのは、小学校六年生の冬のことであった。志願兵であった古風な性格の担任の先生にとって、私たちのクラスは、定年を迎える最後のクラスであった。先生も思い残すことのないようにと思ったのだろう、小学生にとつては少々難しい話も度々、話してくれた。その先生が私たちの将来のためと教えてくれたのが、河井継之助の言葉であった。

あと二か月で卒業式を迎えようとする頃、先生がホームルームの時間に「皆はこれから中学、高校、その後は就職や大学で新潟県外に住む人もいるだろう。もし、新潟県外の人たちから新潟県の有名人は誰ですか、

と聞かれたらこう答えたら間違いはない」と教えていただいたのが「越後の英雄は二名あり、一人は上杉謙信、二人には釋良寛」という言葉であった。新潟の有名人は一人目が上杉謙信で、二人目は良寛さんだ、そう答えられたら間違いはない、と教えてくれた。そして最後に、この言葉は、長岡の河井継之助という人の言葉だと、教えてくれたのであった。

これまで、その継之助の言葉を重宝し、幾度も話してきたが、ある時疑問が生ずる。何故、継之助が、良寛を越後の英雄と呼んだのかということである。英雄とは、勇敢で高潔であり、その類まれな能力によって何かを達成、もしくは功績がある人物のことである。上杉謙信が英雄であることは、誰もが容易に理解でき、

疑問に思わないことだろう。上杉謙信は戦国時代当時、他の大名が私利私欲のためにこぞって版図拡大を狙う中、義を重んじて領土に興味を示

さなかった。しかし、それにも関わらず、戦えば常勝であった。そして、上杉謙信の最たる功績は、越後に外敵の侵入を許さなかったことである。



良寛ゆかりの虎岸ヶ丘「良寛と夕日の丘公園」に建つ『語らいの像』

それ故、上杉謙信は英雄と呼ばれるのである。一方の良寛はというと、書道の達人で秀逸な詩歌を詠み、普段は子どもと手毬について遊んでいるという不思議な人である。しかも、謙信とは逆に、小さな動植物をも殺めることもしなかった。有名な逸話では、縁側から生えた筍を切らずに育てて喜び、蚊も叩かず蚊帳から腕を出して血を吸わせたという話もある。それらの行動から、良寛は「北越の一奇人」とも呼ばれている。そんな良寛を継之助は何故、英雄と呼んだのだろうか。

上杉謙信と良寛の共通点

そんな両極端な上杉謙信と良寛であるが、両名には共通点がある。それは両名が「無敵」であることである。上杉謙信は戦えば必ず勝つ「無敵」である。そして良寛は、誰からも慕われ敵対する人が皆無の「無敵」である。継之助は対極する「無敵」の英雄から学べ、と云うのである。しかし、大衆が英雄に学び近づこうとしても、なかなか大成はしないものである。それで、継之助は対極する二人の英雄に学ぶことによって、

二人の間に立ち、自分らしく大成して欲しいと考えたのではないだろうか。「越後の英雄は二名あり、一人は上杉謙信、二人には釋良寛」この言葉は、継之助の教育方針と思えるのである。その考えに及んだ時、河井継之助という人物に、大いに魅力を感じたのである。

河井家と良寛

継之助の言葉が示す通り、継之助が良寛を英雄として尊敬していたことは、疑いようのないことである。では、継之助はいつ良寛を知り、尊敬するに至ったのだろうか。実は継之助の父代右衛門と良寛は友人であり、良寛は度々、河井家を訪問している。良寛らしいのは、河井家に珍しい蔵書があることを知ると、代右衛門が留守でも屋敷に上って本を読んだそうである。そして、読み終わるといつの間にか帰って行ったと云われている。武家の屋敷に勝手に上がるだけでも咎があると思われるが、それが許されている良寛はやはり、不思議な人である。良寛は、河井家滞在中に漢詩「訪聴松庵」を詠んでいる。

読み下し文

題『聴松庵を訪ねる』

托鉢してこの地に来る
 冷秋八月の秋
 地寒くして荷葉枯れ
 天高くして蟬声収まる
 我が性嗜む所なく起座
 思ひ悠々たり時に自ら
 書帙を探れば方目すべて牀頭

意訳

『聴松庵を訪ねる』

(聴松は代右衛門の号)

托鉢をしながら長岡の地に来て、涼しい八月の秋を迎えた。長岡の周辺は寒々としたし、蓮の葉も枯れてしまった。天は青々と澄み渡ってはいませんが、蟬の声も聞こえなくなった。私は呑気な性格とこの地で特に為すべきこともないので、起きたり坐ったりと、気ままに過ごしていた。そんな時、本を読もうと思いついた。そんな本の書帙を探してみると、読みたい本はすべて枕元にあり、すでに読み終っていたのである。私はもう随分、聴松庵で長居をしたことに気づいたのである。

右掲の漢詩からは、良寛が河井家で寝たり起きたりの読書三昧であること。また、好きな本をすべて読み終えるほど、長い滞在であったことが分かる。そんな、勝手気ままに過ごす良寛に代右衛門は、何も言わないのである。ここからも、良寛と代右衛門が、親しい関係であることが窺える。その長い滞在中に書かれた一つだと思われる作品に、河井家の屋敷を称した良寛遺墨扁額「聴松館」がある。(長野県在住個人蔵) 漢詩では「聴松庵」と題しているが、扁額では「聴松館」と「庵」を「館」に変えて書かれている。良寛は言葉遊びが大変好きな人である。親切な人には感謝の気持ちを込めて一文字多い書を贈り、意地悪をした人には一文字少ない書を送るなどしている。また、字を変えることで、気持ちの深さを伝えたりする。良寛遺墨「聴松館」で良寛は、河井家の聴松庵は「庵(こじんまりした家)」と称しているが「館(大きく懐が広い)」と称して相応しい屋敷であること。そして、聴松庵は、自分を育ててくれる学びの場「館」であると、代右衛門とその屋敷を讃えたのだろう。「聴松館」の揮毫から、良寛の代右衛門



長岡藩主牧野忠精が、良寛に胸中を打ち明けた五合庵

への感謝の深さが伝ってくる。

継之助の中の良寛

右掲の様に、良寛は河井家の人たちと親しくしているが、継之助と相見したかについての記録はない。良寛が逝去したのは天保二（一八三二）年である。その時継之助は五歳であ

る。筆者の願望としては、良寛が幼い継之助の遊び相手になったと思いたい。しかし、実際に会っていたとしても、おそらく幼い継之助が、明確に良寛を覚えていることはないだろう。それでは継之助は、良寛のことを誰から聞いたのであろうか。それはやはり、良寛の友人である父代右衛門と良寛を接待した家族からだ

ろう。では、継之助は代右衛門から良寛のどのような話を聞き、良寛を英雄と呼ぶに至ったのだろうか。それについては、継之助も名君と尊敬した長岡藩第九代藩主牧野忠精と良寛の逸話だと考える。

牧野忠精は歴代長岡藩主の中でも特に名君と呼ばれている。良寛僚友の有願和尚も忠精の治世を「争いごとのない穏やかな世」と称している。

その忠精が長岡城中に新たな寺院を建立し、その寺院に良寛を住職として迎えたいと願うのである。忠精のその意図は、誰からも慕われた良寛から城下の寺院（長岡城内の説も有り）に入寺してもらうことで、新たな門前町を形成し、城下に賑わいを持たせたいと考えたのだろう。良寛の長岡への誘致は、忠精の都市計画なのである。その計画が藩の一大事業であったことは、良寛入寺の招致を藩主の忠精自らが、良寛の住む五合庵を訪ねて交渉したことから分かる。しかし、忠精の申し出に良寛は、有名な「焚くほどは風が持て来る 落葉かな」の俳句一つで断るのである。そして、忠精は、その返句として「来てみれば 山ばかりなり 五合庵」（意訳…五合庵に来てみ

ると、周りは山ばかりであった。そして、そこに住む人もまた、山のように動かすことのできない人であった）と詠み、良寛の入寺を諦めるとともに、良寛の偉大さを讃えたのである。

おそらく継之助は、牧野忠精と良寛のそのやり取りを、幼少の頃から代右衛門や家族から聞かされて育ったのではないだろうか。幼い頃に遇ったという記憶はなくても、物心がつき、名君と呼ばれた藩主からも讃えられた人物が、我が屋敷を訪れていたという事実を誇りに思ったのかも知れない。そこに至り、継之助は、良寛を英雄視する様になったと考えるのである。

今一つ、継之助が良寛を称した言葉に「越後の三豪傑は一に上杉謙信、二に良寛、三に酒呑童子（順序が異なる説もあり）」というものがある。豪傑とは、我々の常識を覆す規格外の人物のことである。上杉謙信については先にも述べた。酒呑童子は源頼光に退治されるまで、京の都を荒らしまわった越後生まれの鬼である。上杉謙信と酒呑童子はどちらも、規格外の性格と行動をする豪傑である。良寛については英雄視と同じく、物

静かな良寛が豪傑であると直ぐに溜飲が降りない。筆者はここでも良寛の英雄視と同じく、継之助が良寛を越後の豪傑の中に加えた理由は、牧野忠精の誘いを断ったことと考える。

江戸時代は封建社会の時代であり、各藩にとって藩主とは、その藩の絶対君主である。藩主の命令、意見に背くことは死罪も有り得るのである。良寛弟子貞心尼と共に、日本初の良寛詩集「良寛道人遺稿」を出版した上州前橋の龍海院住職の蔵雲和尚は、播磨第七代藩主酒井忠顕から相談役に指名され、一緒に城内に住んでいる。僧侶であっても、藩主の命には従っている。それを良寛は、俳句一つで断ったのである。もし、忠精が短気な性格であつたらどうなつていただろうか。良寛は、藩主の命令でも、自分の生き方を曲げない規格外の人物。それ故、継之助は良寛を越後の豪傑の中にも加えたのだろう。

良寛を見出した 継之助の魅力とその精神

継之助の魅力とは何であろうか。よく注目されるのは北越戦争に於いて、倍以上の兵力である新政府軍を四か月以上に渡り苦しめたその統率

力と用兵家としての手腕である。その戦いは、越後人としてのプライドを懸けた戦いであつたと云われる。また、有名な話では、当時日本に三門しかないガトリング砲の内、二門を買付け長岡に配備したその先見の明を継之助の魅力と語る人も多い。しかし、それは継之助の表面上の評価と考える。注目すべきは、当時、日本全体が新政府側か幕府側かで二極化する中、継之助は新政府にも幕府にも寄らず、中立と

いう第三の選択をしたことである。筆者にとつての継之助の魅力とは、当時の混乱の中で全体を見通す世界に生き、第三の「選択と決断」ができたことである。その世界から導き出した「何としても戦争を回避する」という、選択と決断に継之助の苦勞と輝を感じるのである。もし、小千谷で継之助と会談したのが、好戦的な岩村精一郎でなかったならば、継之助は郷土のために

どれほど活躍したのだろうか、期待が膨らむのである。北越戦争の敗戦後、最後まで不戦派であつた、同じく長岡藩の小林虎三郎は、新政府よりその事後処理を命ぜられる。虎三郎はその激務の中、結果的に開戦に踏み切つた継之助を一切批判しなかつたという。虎三郎のその沈黙は、継之助の苦勞と苦惱、そして開戦を不本意としていたことを理解していたからだろう。



五合庵に建つ良寛の句碑 牧野忠精の申し出を断る句が刻まれている

現在、世界ではロシアとウクライナの戦争やイスラエルとハマスの紛争が、毎日報道されている。受け取り方によっては「貴方はどちらを支援しますか」と、問われている様にも聞こえる。安易と言われてしまうかも知れないが、そのような状況だからこそ、継之助の生きた世界に、学ばなければいけないのではないだろうか。そうなることを願わずにはおれないのである。

現代は、個人の生き方ということが尊重される時代である。今まさに、継之助の云う、対極する二名に学び、それでいて一方の誰かによるのではなく、確かな自分という生き方を歩む時代ではないだろうか。継之助の魅力とその精神は「越後の英雄は二名あり、それは上杉謙信と釋良寛」の言葉に極まるのである。

プロフィール

永賣卓

(ながとみたかし)



真宗大谷派僧侶
昭和48年 新潟市北区(旧豊栄市)生まれ
平成26年 出雲崎町良寛記念館学芸員として入館
現在 出雲崎町良寛記念館館長兼学芸員と柏崎市浄敬寺の法務を兼任

館長が行く

河井継之助頌徳碑をめぐる 三島中洲と外山脩造

悠久山には河井継之助の頌徳碑がある。この碑は長岡駅付近、かつての長岡城本丸跡に建てられていたが、大正七年（一九一八）悠久山に移された。題額「故長岡藩総督河井君碑」は黒田清隆による。山田方谷の門弟であった三島中洲が、明治二十三年（一八九〇）碑に寄せた一七〇〇字に及ぶ撰文は、継之助の事蹟と風容を伝える名文である。

石碑の裏面に尽力した人物として外山脩造の名がある。外山はどうかかわったのか、ずっと疑問だった。ところが、撰文について中洲が外山に意見を求めた時の返信が二松學舎大学に所蔵されていることを昨年三月に知った。十二月五日に附属図書館司書の山崎和正氏を訪問し、書簡を閲覧することができた。

外山は、中洲の文には承服できない部分があったらしい。「一言一句も死者の精神に背達しないようにしたい」と言って具体的な意見を書き送り、あわせて参考のため一書をしたため、その選択は中洲にゆだねた。側近として、継之助の真価を知って

外山脩造

三島中洲宛書簡

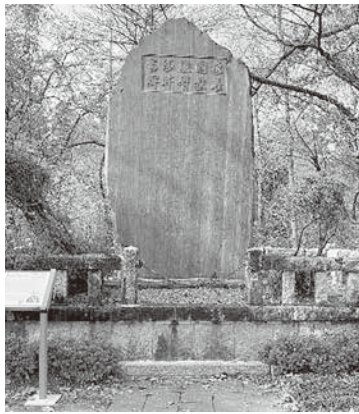
（明治二十三年（一八九〇）頃
某月二五日付）

拝啓。今朝ハ難有奉謝候。陳ハ御参考之為メ草シタル一書別紙差出し申候間、御落手奉願候。勿論取捨ハ老臺ニ一任仕候間、御随意御取捨之程奉願候。将又文章上之事ハ固ヨリ、小生輩之彼是可容喙ニ無之、唯々事実上より斯之如を欲すると、一言一句にても可成ハ死者之精神ニ背達せざる様いたし度との熱心より茲に至り候次第ニ有之候間、其心情御洞察被下、事失敬に涉り候義ハ偏ニ御海容之程奉伏願候。頓首謹言。

廿五日

中洲先生席皮下

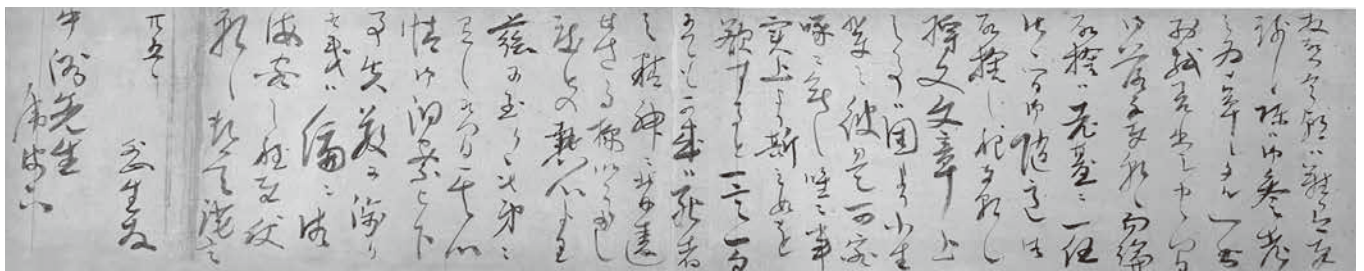
外山生拝



悠久山に建つ河井継之助頌徳碑

おり、世評とは違う継之助の生涯を大切にしたいという。中洲は、「国を憂いて謙譲す、忠定になんぞ恥じん儒を学びて善く戦ふ、文成に惟れに似たり。時なるか不幸にして、此の乱離に遭う。ただ民を護するのみ、何ぞ躬の危うきを避けん。ただ賊を防ぐのみ、何ぞ王威を犯さん。礪々たる信事。天知る地知る」と結んでいる。のちに中洲は外山の墓碑も撰文した。

継之助の姿を伝えようとする中洲と外山の思いがこもった碑の前に立つと、「時空を超えても河井継之助の真の心を伝えているか」という声が聞こえてきた。あらためて人間河井継之助を追い求めたい。（中田）



書簡の解読文は「三島中洲と近代一其八一」（二松學舎大学附属図書館発行）より転載（解読文は同大学教授の町泉寿郎氏による）

山崎和正氏からは、ご多用の中対応していただき、資料等も提供いただきました。心より感謝申し上げます。

第十五回 交流研修旅行

令和五年九月十六日、ウイルス禍で中止となっていた交流研修旅行を四年ぶりに催行しました。参加者は総勢二十五名、向かうは河井継之助終焉の地・福島県只見町です。今年度は初心に帰り、河井継之助の最期を見つめる旅へ。

皆さんの集合が早く定刻前に記念館を出発でき、十時前に只見町に着きました。そこからは只見町在住で友の会会員である新国勇さんに同乗してもらい、ガイドをしていただきました。

まずは、只見町の自然と歴史の説明を聴きながら、塩沢にある河井継之助記念館へ向かいます。展示の説明も、新国さんにしていただきました。見学後は全員で河井継之助のお墓がある医王寺へ。参加者一同、心から哀悼の意を捧げました。

その後只見町まで戻り、長岡藩士・石垣龍三郎の墓をお参りしました。彼がここに埋葬された経緯は不明ですが、現在も現地の方が大事に墓守されています。

昼食は旅館みな川にて、只見町の食材が満載の郷土食をいただきました。

た。岩魚の塩焼きに加えて名物の炊き込みご飯まで、皆さん大変おいしく楽しませていただきました。



旅館みな川の昼食

午後は、丹羽族（にわかから）自刃の家に行きました。丹羽族は、会津藩から代官を命じられ、只見で長岡藩士とその家族の受入れに奔走しました。しかし、小さな寒村には多すぎる避難者で溢れたため、万策尽きて責任を取り自害しました。悲報を知った只見の人々はその忠義に感心し、わずかな蓄えまで持ち出して長岡の人々を救ったのです。外観のみの見学でしたが、心のこもった説明に心を打たれました。

ほかにも、継之助が逗留した目明し清吉の屋敷跡、西軍の本陣にもなった叶津番所を見学しました。最後にインフォメーションセンターでお土産を買い、只見駅前で集合写真を撮りました。

当時の只見の人たちの心温かいもてなしと、現在も河井継之助の墓だけでなく、一藩士の墓も大切に守っていたらいいという、只見の方の優しさを知る交流研修旅行になりました。

最後になりましたが、新国さんには、研修場所の選定のみならず、食事会場の手配までしていただき、ありがとうございました。

（今井）



只見町河井継之助記念館



石垣龍三郎の墓



只見駅前での記念写真



医王寺 河井継之助の墓

開館十七周年記念講演会

令和五年十二月三日開催（於・長岡グランドホテル）

河井継之助の思想像をさぐる — 陽明学と藩学のあいだ —

講演会を聴いて

令和五年十二月三日、中京大学文学部歴史文化学科小川和也教授をお迎えし、開館十七周年記念講演会が開催されました。

演題は「河井継之助の思想像をさぐる — 陽明学と藩学のあいだ —」です。

二百五十余名の聴講者の皆さんは大変興味深く聴き入っていました。



牧野家十七代目当主
牧野忠昌



小川和也先生とは、御著書『秋山景山』を出版された時以来のお付き合いである。

今回の講演は、継之助が長岡藩の藩学を良く学び、自らも貪欲に勉強し、志を持って努力したことをお話頂いた。私も大変勉強させて頂いた。

長岡市観光・交流部長
星 雅人



継之助の思想形成や行動原理の底流には、広く知られた陽明学だけでなく、長岡藩学も大きな影響を与えたという清新な視点での解説は、大変興味深いものでした。参加者からも「新しい継之助像を知ることができた」といった感想をいただいております。郷土の先人と教育との関連性に光を当ててくださった小川先生に感謝申し上げます。

長岡市議会議長
加藤尚登



富士山の姿が登山中に見えないように離れないと見えないものがある。日本が生き残るための大変革……その中に長岡の河井継之助がいた。あまりに近すぎて見えなかった彼の姿がようやく見えてきた。

河井継之助記念館
友の会会長
星 貴



小川和也先生の説得力のある解説にお客様も満足された様子でした。先生の見解は綿密に裏付けとなる資料を収集し掘り下げているからでしょう。しかしそれ以上に感心させられるのは先生独自の人を引き付ける話術なのです。

遠方からの客人

◆ インタビュー ③④

栃木県よりお越しの上野晴夫さん



令和5年12月13日

● 来館のきっかけは

友人と長岡花火を観に来岡したことがあり、その時に河井継之助記念館を知りました。今は全国の護国神社巡りが趣味で、今回新潟に来たので、いい機会だと思い来館しました。

● 河井継之助を知ったきっかけ

小説「峠」を読み、知りました。映画「峠 最後のサムライ」は時代劇としてのクオリティが高かったと思います。

● 河井継之助はどういう人物

江戸時代という封建社会で、各人が独立した考えを持つことは難しいです。その中で、河井は新選組・清河八郎のように信念を持っていたと感じます。

● 当館について

このような記念館をもっと周知してほしいです。NHKニュースなどで取り上げてほしい！
子供のころに河井のような人物に触れると、良い啓発になるでしょう。

記念館近況報告

▼令和五年九月九日、会津若松市本光寺にて長岡藩士殉節弔霊祭が執り行われ、友の会からは星会長、中田館長が参加しました。詳細は前号会報『峠』三十四号「館長が行く」にて掲載しています。

▼令和五年十月八日、栄涼寺本堂に於いて河井継之助没後一五六年祭法要が執り行われました。感染禍で中止が続いていた「市民の集い」も四年ぶりに開催することができました。



▼令和五年十月十四日、第十三回八丁沖ウォークを開催しました。県内から約八〇名が参加し、歴史が好きな小学生や手作りの甲冑を纏った小学生もいてとても和やかなウォークとなりました。



河井継之助記念館 友の会について

会員の交流や情報交換を通して継之助について学び親しみ、記念館を応援する会です。

●**会員数**／正会員 437名 協賛 43名 小・中学生3名 顧問 2名
合計 485名 (令和5年度会費納付済)

●**特典**／①入会時に徽章贈呈 ②友の会会報「峠」配布
③交流研修旅行の案内・参加 ④催事案内・参加

●**入会手続き**／(入会金千円が必要となります)
①申込書に入会金と会費を添えて、事務局へ持参。
②申込書を事務局へ送り(郵送、FAX)、入会金と会費は銀行振込または郵便振込で納入。(手数料は本人負担となります)

会員募集中

●**会費**／※会計年度は3月31日まで
・入会金／千円(新規入会時のみ)
・年会費／①正会員／(ア)小中学生:500円 (イ)高校生以上:2千円
②協賛会員／一口5千円(法人の他、個人でも可)

●**口座について**
・加入者名／河井継之助記念館友の会
・口座番号／郵便局 00560-9-96432
長岡信用金庫本店営業部 普1032829
第四北越銀行長岡本店営業部 普1764663
大光銀行本店営業部 普3011256

※郵便局の場合は払込用紙が事務局にありますのでご利用ください。

●**友の会事務局**／河井継之助記念館
友の会ホームページアドレス
<https://tomonokai.tsuginosuke.net/>



新入会員ご紹介

(令和5年8月16日から令和6年2月15日まで)

垣内 武	神奈川県藤沢市	一松 哲夫	東京都杉並区
小宮 慎之助	新潟県小千谷市	長谷川 智久	茨城県水戸市
永井 潔	千葉県柏市	小林 良博	新潟県長岡市
石崎 雅史	東京都調布市	成田 智志	新潟県長岡市
長谷川 昌伸	埼玉県川越市	本田 松子	新潟県長岡市
小久保 純一	三重県四日市市		

以上11名(敬称略)

編集後記

元日早々、能登半島地震が発生し、被災された方々に改めてお悔やみ申し上げます。継之助のことばに「天下になくはならぬ人となるか、有ってはならぬ人となれ。」とありますが、せめて後者の気構えを持ち、明るくなる年を願うばかりです。(白石)

当会発起人であり、副会長や相談役を歴任された田中愛子(玉蘭)さんが令和五年十一月にご逝去されました。書道家として活躍され、記念館の看板も揮毫していただいています。また、当会報の題字「峠」は平成二十一年に寄せていただいたものです。その時の思いが、会報『峠』四号巻頭に綴られています。是非ご覧ください。



令和六年三月四日に、当会相談役の内山弘さんが急逝されました。当会発足時から副会長に就任され、長きに渡りご尽力いただいております。郷土史研究のほか、各方面で活躍されていた内山さん、当館に展示している「ガトリング砲」の復元にも携わってくださいました。会報『峠』第六号で「ファールブルブランド」について執筆いただいております。ご冥福をお祈り申し上げます。



【訂正とお詫び】 会報『峠』35号8ページ「総会・講演会報告」文中にて会場表記に誤りがありましたので、訂正してお詫びいたします。

誤…長岡グランドホテル 正…アオーレ長岡 市民交流ホールA